

DGAKI-JSA 2019 報告⑤

国立病院機構相模原病院臨床研究センター病態総合研究部
佐藤さくら

この度はドイツアレルギー学会との第1回目の合同会議へ参加する機会をいただき有難うございました。日頃か
らご指導いただいている先輩方、一緒に働いているスタッフ、そして会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様に
感謝申し上げます。

【全体を通して】

基礎研究に加え診療科横断的なテーマで構成されたプログラムでした。日頃なかなか聞くことが出来ない他分野
の研究についてもじっくりと拝聴することができ、演者と参加者が双方向でやりとりする場面も多く、インタラク
ティブな内容でした。さらにドイツでは臨床と基礎研究とのコラボレーションで研究を進めている状況も教えてい
ただき、今後は国内だけでなく国際的な共同研究の推進も重要なことを理解しました。

コーヒープレイクや食事中には、研究だけでなく、診療に関する情報交換やお互いの国の文化の違いについて
の話など、様々な交流ができて刺激的でした。コミュニケーションツールとしての英語力の重要性を改めて感じまし
た。

【食物アレルギー・アナフィラキシーのセッションについて】

私自身は日本の食物アレルギー診療の状況・アナフィラキシー症例の全国調査の結果を踏まえて、経口免疫療法
によるアナフィラキシー症例の問題や、現在我々の施設で取り組んでいる免疫療法や段階的な食物経口負荷試験な
どについて紹介致しました。ドイツの先生方からは食物アレルギー診療の考え方の違い、特に日本では当たり前
になっている「近隣の医療機関で負荷試験を行う」ことや、「負荷試験結果に基づいて食べられる範囲までは食べるよ
うに指導する」ことへの質問や意見をたくさんいただきました。私自身はドイツで負荷試験を実施している施設数
が非常に少ないことに驚きました。同じセッションではBlümchen先生がヨーロッパと日本の食物アレルギー診療
ガイドラインを比較しながら発表され、食物アレルギーの診療をめぐる違いについてお互いに意見交換をすること
ができました。この試みは非常にアトラクティブであり、次回以降もこのようなセッションをぜひ考えていただい
ければと思います。

【最後に】

日本で行われているアレルギー診療の取り組みや臨床研究・基礎研究は素晴らしいということを改めて感じた2
日間でした。ただその内容を国際的に発信する力は大事で、ぜひ若い先生方には国際的な交流を積極的に行ってほ
しいと思います。